

綴じ合わされる日記の物語：

アイルランドの犯罪小説，Gemma O'Connor の *Falls the Shadow*

舟橋美香

はじめに

ミステリファンの方々に、アイルランドの小説家、Gemma O'Connor を御紹介したい。

しかし、こう書いてしまうことには、かなりの躊躇も感じる。たしかに、彼女の作品は、「純文学」(literary fiction) よりも大きな読者層を対象とする大衆小説 (mass-market fiction) の稼ぎ頭、日本ではミステリと総称されている thriller あるいは crime という範疇に分類される。しかし、ジェマ・オコナーの作品には、このようなジャンル分けを攪乱する要素がある。もし犯罪小説に、ある人物の他者による暴力的殺害という犯罪が必要不可欠なものとするならば、彼女のデビュー作、*Sins of Omission* (1995) を犯罪小説と呼ぶことはできないだろう。この小説において、殺人は、自殺以外には、ひとつとして起こらないからである。そもそも、彼女の作品をミステリと呼んでしまうと、ご本人はあまり喜ばないかもしれない。第4作の *Time to Remember* (1999) では、第二次世界大戦中にフランスの村で実際に起こった600人を超える虐殺を取り上げ、戦争犯罪とそれに加担した個人の問題を扱っている。この作品を発表直後に、彼女は、あるサイトのインタビューに応じている。その中で、「あなたの小説は、簡単な分類法では納まりがつかない。犯罪小説でもないし、スリラーでもないし、心理的ミステリでもない。それらすべてのハイブリッドすね」と言われて、ジェマ・オコナーはそれに賛同し、「ハイブリッドというのはいいけれど、たぶん小

説 (novel) というほうがもっといいかもしれない。私がほんとうにしたいのは、物語を語ることなんです。また、私にとっておもしろいと思ったり、私が悩んでいるテーマを投げかけたいとも思っています」と語っている⁽¹⁾。

ジェマ・オコナーの作品に共通する特徴は、現在と過去の交叉である。過去、あるいは歴史が、いかに個人に影響を与えるかを、彼女は繰り返し、物語のテーマにしている。したがって、彼女の作品は、歴史小説あるいは社会小説としても読むことができる。作家の第1作には、たとえ完成度に問題があっても、その作家がその後に繰り返し追求していくテーマやメッセージが、もっともなまの形で表れていることが多いが、彼女の *Sins of Omission* は、この好例であろう⁽²⁾。この小説のテーマは、タイトルに表れているように、消し去ること・削除してしまうことの罪である。錯綜する物語は、自分のアイデンティティの一部である過去の履歴を消し去ることが、家族をも消し去ることとなり、結果的に、本人と近親者を蝕み、ひいては、生死にかかわる甚大な影響を及ぼす恐ろしさを徐々に明らかにしていく。法的に裁かれる犯罪 (crime) ではなく、ひととひととのあいだで犯される罪 (sins) の重さを、この小説は描き出している。

削除とは、語らないこと、すなわち沈黙である。沈黙と秘密をめぐるテーマは、彼女の第2作にも引き継がれているが、また、「アイルランドの女性の沈黙を解釈しようとすることは、近年の研究の多くが目指してきたことである」(Gray:2000, 272)。アイルランドでは、とくに1990年以降、才能に溢れた女性の詩人・小説家・劇作家の活躍が活発化している。長い沈黙を破って、女性たちの声がようやく響きはじめた感が強い。さまざまな分野における女性の学者による研究も増加してきている。そこで、本稿では、これまでの彼女の小説の中で、私がもっとも独創的で面白いと感じている *Falls the Shadow* (1996) を取り上げ、この小説の魅力を、それが提起する沈黙をめぐる問題とともに探っていきたい。

1

ジェマ・オコナーは、ダブリンとロンドンを舞台にした *Sins of Omission* (1995) で、小説家としてデビューした新進の作家である。現在、最新作の *Walking on Water* (2001) までの全5作品が、にわとりマークで知られるペーパーバック出版の大手 Bantam Books から出版され、その販路は、アイルランド、英国、アメリカ、オーストラリアに広がっている。カナダでは、版權を取得した McArthur & Company が98年から4作を出版している。これで、ほぼ英語圏の読者層のおおかたがカバーされていることになる。残念ながら日本での翻訳紹介はまだされていないが、96年のドイツとオランダを初めとして、スウェーデン、エストニアでも翻訳版が出版されている。すでにドイツでは4作品が、オランダ、スウェーデンでも3作品が出版され、最新作の著作権は、ドイツ、オランダ、カナダで買われているので、今後出版されることが予想される。

バンタムが、ジェマ・オコナーを世界的なセールス市場に送りだしたわけだが、彼女の才能を発掘したのは、彼女の第2作 *Falls the Shadow* までを手掛けたダブリンの出版社 Poolbeg Press Limited であった。1976年に設立されたプールベッグ社は、赤い燈台のロゴマークでその使命を表明しているように、‘The Irish for Bestseller!’ をスローガンに、世界的なベストセラーを送りだす潜在力をもつ国内の新しい才能の発見に力を注ぎ、これまでに多くのアイルランドの作家を送りだしてきた。ジェマ・オコナーもまさにその期待に応えた一人であり、彼女は、最新作の献辞を、1993年からプールベッグの編集を勤める作家 Kate Cruise O’ Brien (1948-) に捧げ、その恩に報いている。

ジェマ・オコナーの生年は不明であるが、50歳代で最初の小説を出版ということであるから、1940年代の生まれではないかと推測される。彼女の公式ウェブサイトから、彼女の経歴を、かいつまんで御紹介しよう。生ま

れはダブリンで、アイルランドとフランスで教育を受けた。エアリングスの客室乗務員をしていた19歳のときに、夫となる歯列矯正技術を専門とする研究者と出会い、ミネソタで新婚の3年を過ごした後、英国のオクスフォードに移り、以後30年、オクスフォードに居を構えている。小説を発表するまで、オクスフォードで、本の製本家と古書の修復家として10年、出版者として3年のキャリアをもつ。1985年には、ロンドンで最初のアイルランド書籍フェアを主催した。一方、アイルランドの女性政治家の著作の編集にも関わり、子育て後に仕事に復帰する女性たちのための手引書、*Back to Work* を執筆。アイルランドの女性についての書物から編纂した劇や、スウィフトと女性たちを描いた劇 *Too Modest Proposals*, 女優による一人芝居 *SigNora Joyce* を発表している (Cf. <http://www.gemmaoconnor.com/biography.htm>)。母国アイルランドと女性問題への関心の高さが窺い知れるが、このような問題意識は彼女の作品の随所に表れている。Virginia Woolf の晩年の短編小説 “The Legacy” の影響については後述するが、作品からは、ウルフの著作をかなり読んだことが推測される。また、とくに最初の三作では、古書の修復・製本と出版についての彼女の知識と経験がいかななく発揮され、これが独特の味わいを出している。

最初の三作品、*Sins of Omission*, *Falls the Shadow*, *Farewell to the Flesh* (1998) には多くの共通点があり、ひとつのトリロジーを形成していると考えられることもできるだろう。まず、三作品とも、二都物語のような趣をもっているのだが、共通する舞台はダブリンである。ダブリンに対峙される都市として、*Sins of Omission* と *Falls the Shadow* ではロンドンが、*Farewell to the Flesh* では、オクスフォードとその周辺がもう一つの舞台になっている。三作品は女性を主人公にしており、それぞれの作品で謎を追っていく探偵役を果たす女性主人公が、三人とも、英国で仕事のキャリアを築き、近親者の死を契機に、故郷のアイルランドに戻るという共通したプロットをもっている。彼女たちは小説冒頭で困難な状況に投げ込まれるのだが、どのよ

うな困難に彼女たちが立ち向かい、いかにそれを切り抜けていくかが、小説の読みどころのひとつとなっている。また、三人の女性はそれぞれ、男性のパートナーを失うか、失いかかった状況に置かれている。異常な事態をくぐり抜ける過程で、彼女たちはパートナーとの関係を問い直すことになる。そして、彼女たちの捜査・探索は、過去への旅となり、それに関連して、家族とはなにかという問題が、とくに母と娘の関係を中心に考察されることとなる。

2

さて、これから、彼女の第2作 *Falls the Shadow* (以降『落ちる影』と呼び、引用中では *Shadow* と略す) をくわしく見ていきたい。この作品では、確かに犯罪が起こる。いや、犯罪は起こってしまっている、と言ったほうが正確かもしれない。小説冒頭で、1941年に起こった一人の男の殺人と未解決のままとなった事件が紹介され、それから50年余りが経って、「私」の母が、ひき逃げされ殺される。小説は、三人称で語られる過去の描写を挟みながら、主人公の Nell Gilmore が、二つの殺人の結び目を探っていく一人称の語りの形でおおむね進行していくのだが、小説の内部には、1941年から20年に亘る日記が収められている。この日記のきわめて特異な点は、それが、ネルの母となる女性の書いたものと、「M」という謎の男性が書いた部分を一緒にし、すばらしい製本技術で綴じ合わされている美装本であるということである。女性の日記を扱った小説は、私を惹きつけてきたテーマであり、この小説の中の日記の特異な性格が、私がこの作品に魅力を感じた大きな要因でもある⁽³⁾。

母が遺した日記のもう一人の書き手とその製本者を追ううちに、ネル・ギルモアは、母親が自分には語ることのなかった過去と、思いもよらなかった彼女の隠された面を知ることとなる。ネルは、複数の男性から、判然としない理由から接近され恐怖感を募らせていく。彼女は、母が愛し続けて

いた M にも危険が迫っていることを知り、母の遺志を継いだかのように、彼の安否を気づかうことになるのだが、そうすると、なんとか彼を見つけださなくてはならない。この追跡、調査のあいだに、ネル自身も身の危険に曝され、一方、恋人との破局と新たなロマンスを経験することとなる。盛り沢山のエンターテインメント作品と申し上げてよいだろう。

プロの探偵でもなく警察に勤めているわけでもないふつうの一般人が、突然我が身にふりかかる危険や、たまたま遭遇した死の謎を追って物語が展開し、そこにロマンスの要素も加味されるあたり、英国の生んだ大ベストセラー作家 Dick Francis (1920-) の競馬シリーズに似ていなくもない。thriller として分類されるディック・フランシスの小説群の人気をささえる理由の一つは、どのような苦境にあってもへこたれない、タフさと冷静さを信条とする男性主人公の造型にあるだろう。とくに『直線』(Straight, 1989) は、『落ちる影』にいくつかのアイデアを与えたのではないかと思われるので、すこし紹介しよう。『直線』は、事故で急死した兄の遺した準宝石輸入会社の立て直しのために、兄が買い付けたはずのダイヤモンドの行方を探る騎手 Derick の活躍を描いている。デリックは、自分の命も危険に曝される探索の過程で、これまで自分が知らなかった兄の生活を知ることになる。まず、このプロットが似ているし、さまざまな物や秘密を自宅やオフィス、コンピュータの中に隠すデリックの兄の人物像とその方法は、日記、写真、手紙などの発見を鍵として進行する『落ちる影』に、ヒントを与えた可能性もありそうである。しかし、二つの作品には、大きな違いもある。『直線』は、デリックの一人称の語り貫かれており、その主人公はあくまでデリックである。一方、ジェマ・オコナーの小説では、語り手であり探偵役を果たすネル・ギルモアよりも、彼女の探究の対象である母親の人物造型にずっと重きが置かれている。それは、ネルによる一人称の語りに、三人称による語りを加え、日記や手紙等を駆使して、彼女の母であった女性を多面的に描き出そうとする工夫からも窺われる。

たしかに、『落ちる影』は、母の過去と実像を探す娘の探索と再発見の物語として読める。読者は、ネルが混乱し危険に曝されながら、秘密を明らかにしていく経過を、はらはらしながら追っていくことになる。その探索と発見の鍵を握るのが、作品の中で母から娘に遺される日記であり、美しく製本されたこの日記は、メインプロットとサブプロットを結びつける役割も果たしている。サブプロットには、父と息子の物語が配され、ジェマ・オコナーが第1作で追求したアイルランド人としてのアイデンティティの問題も隠されている。非常に盛り沢山な小説であるのだが、本稿では、娘による母親探しのメインプロットに焦点を絞りたい。なんとといっても、この小説の最大の魅力は、ネルの母であった、Lily Gilmore (*née* Sweetman) という女性の造型に依ると思われるからだ。まず、このリリー・ギルモア(旧姓スウィートマン)をどのように小説に登場させているかをじっくりと見ていくことにしよう。

すでに述べたように、ジェマ・オコナーの作品の大きな特徴は、現在と過去との交叉である。一人称による主観的な語りと三人称による語り、場面によって使い分けられ、物語は、まるでビデオを一気に早送りしたり巻き戻したりするように、時間と空間を行き来する。映画的と呼ぶこともできるだろう。この手法が、50年の時を隔てた二つの犯罪の関係を扱う『落ちる影』ではきわめてうまく機能している。では、小説の世界に御案内しよう。『落ちる影』は、このように始まる――

誰も彼の死を悼まなかった。彼の息子以外の誰も、彼について再び口にするとはなかったろう、嫌悪感や怖れを表すか、あの男があんなにあっさりと始末されてしまったことにほっとして、恥じ入ったようなしのび笑いを漏らさないでは。もし後頭部に撃ち込まれた弾丸を、あっさりと、と表現してよければだが。(Shadow, 1)。

見事な出だしである。ときは、1941年5月31日、中立を宣言していたアイルランド自由国の首都ダブリンがドイツ軍による爆撃を受けた夜であった。殺しのあった場所は、Ringsend。被災地域のNorth Strandからさほど遠くない、リッフィー川をはさんだ対岸になる。その夜を「殺人者、その一味が選んだのは…ほとんど神からの啓示のような幸運であった。爆撃と殺人はまったく時を同じくしていたため、その殺人は、大きな災禍の影に隠れてしまった」(Shadow, 1)。かくして、この犯罪は、歴史的な戦禍にかき消され、大きく取り上げられることもないまま未解決となり、「ほとんど忘れられたかのように見えた。しかし、記憶は長くつづくものであり、その報いは人目につかないように要求される。50年が経過する……」(Shadow, 1)。

第1章も、唐突な死の報告から始まる——「私の母が殺されたのは、6月28日のことだった。私は休暇でマジョルカ島にいた」(Shadow, 3)。この章は、突然母を失った30代の女性、ネル・ギルモアの一人称の語りによって構成されている。読者は、50年前の殺人事件が、「私の母」の死となんらかの関係があることを推測し、彼女がどのようにしてどこで殺されたかを知りたいと思うのだが、ネルの語りは、なかなかその単純な情報を明らかにしない。作者のねらいは、まず、ネルが受けた打撃の大きさを読者に印象づけたかったのだと思われる。「聞いたばかりの知らせが頭のがんがん食い込み、私は、暗く深い沈黙の中に落ち込んでいった」(Shadow, 3)。一人でダブリンへ飛び、警察で死体確認をしたときにも、「私は母の顔を思い出すことができなかった。しかし、その間じゅう、彼女のことを考え続けていた」(Shadow, 3)。

このネルの思考を再現するかのよう、「彼女」について思い出されることが、印象の断片のように語られていく。一見とりとめなく見える語りは、「彼女」の人生を徐々につくりあげていく。つまり、ネルを産んだときに37歳になっていた彼女について、ネルが思い出せるもっとも古い時代から、死の直前に向かっての変化を追っていくことになる。また、きわめて情報

量の多いこの章は、彼女についてネルがどう考えていたかの集積でもある。いくつかを拾ってみよう。「幼かった頃から、私の母はひとりの人間 (individual) だということに気づいていた。感情を表に出さない彼女の落ち着きを理解するようになったのは、大きくなってからだったが。自分のことを本当に愛してくれていた、これは確かだった。お父さんにどんな気持ちをもっていたのかは、よくわからない。父は母よりかなり年上だったので、彼女があんなに強い個性の持ち主であるとわかっていたはずはない。…お父さんは彼女を子どもみたいに扱っていると感じたこともあった」(Shadow, 3-4)。「60歳になってからすこし太りはじめた…ずっとずっと若返った。…彼女は年をとるにつれて落ち着いて満足そうだった。でも、ぼっちゃりしてるなんて彼女のことを言ってるのを聞いたら、ぜったい許してくれないだろう。彼女は死ぬまでずっと、自分がどう見えるかにはすごく気を遣っていて、自慢にしていたのだから。彼女はほんとに小っちゃくてやせていて、それ以外の自分の姿を想像したことなんかなかったろう」(Shadow, 4)。自分が大学に行く頃から、髪をきれいにセットするようになって、友だちは素敵だと言ったけれど、自分としてはどうかしてるんじゃないかと思った。父が引退してからは母が家計を支え、自分が大学に行けたのも彼女のおかげだったのに、当時は当然みたいに考えていた。父が発作を起こした後は、文句一つ言わずに看病し、なんとか生活費をひねり出していた。その頃に、安い工料でお直しや繕いをしていた母の洋裁の仕事は、豪華なパーティ向けのロングドレス製作に転換し、仕立て料も彼女自身もランクアップした。「あの目のさめるような原色はちょっといきすぎじゃないかと思っていたけれど、実際は、それを着ると彼女はちゃんとして見えた。陽気そう。ぱっと目を惹くくらいすてきと言ってもよかったかもしれない」(Shadow, 6)。

小柄で働き者。はっとするような色の服を着て、いつもおしゃれに余念がない。50歳の半ばを過ぎてから、運転免許も取ってしまう元気で好奇心

旺盛な女性。年齢を重ねてから、人生を愉しみはじめた女性の姿が浮かび上がってくる。彼女は、ネルが卒業後にロンドンで働く決意をしたときにも、夫の死の直後であったにもかかわらず、その決意を尊重し、『ずっと旅行したいと思っていたのよ、で、ようやくこれのできるんだわ』と言った。そのときから、彼女をひとりの人間として知るようになったんだと思う」(Shadow, 8)。実際、彼女は、年に2回はロンドンに遊びにくるようになり、ネルがドイツ系企業の英国オフィスで重要な仕事を担当する頃には、ネルの職場のあるヒースロー空港から出ているコーチバスに乗って、一人で観光地めぐりをすることを思いつく。仕事に忙しいネルが恋人とのつき合いを優先できるようにとの配慮も口にした。『ねえ、もし私の年齢になって人生を愉しめないなら、それって哀しくない？ 心配するのはやめて、自分のことを考えなさいな』…私達はふたりともリラックスして、それ以降、彼女が遊びにくるのは本当にわくわくすることになった」(Shadow, 11)。「私達の人生の新しい章が始まったのだ。…そのときになってわかったのだが、私は、彼女に、自分が住んでるところを好きになってほしいとずっと思っていたのだ。イングランドの美しさをわかってほしいと。…何年もかけて、彼女のリストの場所を私も訪れてみたので、私が家を出てから初めて、私達には、共通のものが、一緒に話す話題ができた」(Shadow, 11)。

さまざまな断片をつなぎあわせるように滔々と流れる語りは、しかし、取り返しがつかない後悔の思いに貫かれている。この章を支配しているのは、いかに自分が母を知らずいたかという、ネルの強い悔恨の念である。

いちばん辛く悔しく思うのは、もし彼女が生きていたら、彼女との間に友情をもてるなんて考えもしなかったということだ。彼女は私の母親だった、それですんでしまっていた。彼女の過去も現在も未来も、あの短い言葉、一生涯をあらわす刑とも言える「母親」(that life sentence: Mother) の中に収まってしまっていたのだ。(Shadow, 5)

ここまで、終始「母」あるいは「彼女」と言い続けたネルは、この直後に、ようやく母のファーストネーム、Lily を明かす。そして、彼女の語りの中には、以下のような述懐が挿入されている——「彼女はよくなにかしゃべっていたけれど、打ち明け話をするというわけではなかった。自分が考えていることは言わなかった。なにも考えてないからだ、もっと若い頃にはえらそうに思っていた。そんなことではなかったと、あとになってわかったのだが」(Shadow, 4)。ダブリン湾を望む閑静な住宅街 Dun Laoghaire の家に、愛着と誇りを抱いていて、『これはね、私のものでしょ』と彼女は言った。それが言葉にできるせいっぱいだっただの。今の私にはその理由がわかる」(Shadow, 7)。作者は、ネルの語りを借りて、リリーがさまざまな秘密を抱えていたことを随所で仄めかし、読者の興味を掻き立てていくことになる。ここまで読み進んだ読者は、リリーがひき逃げされ放置されて死に至ったことが明かされても、その背後にある動機を知るまでは満足できないだろう。また、この章は、小説を読み進むときに、どのあたりに特に注意すべきかのチェック項目を、読者に示唆する役割も果たしている。読者とネルは、リリーが示していた細かなこだわりの背後に隠された、彼女が語ることのなかった辛酸に満ちた若い頃の経験と、それでも明るく生きていこうとしてきた、彼女の暮らしぶりを知ることになる。

母親の苦労は、子どもからは見逃されがちなものだ。しかし、リリーが隠していたのは、辛い過去ばかりではなかった。観光したさまざまな場所について、ネルと彼女の親友の Maria に話して聞かせていたリリーの話は、じつは、ガイドブックからの情報によっていたことが、彼女の死後にわかる。「オックスフォードだけに、彼女は何度も何度も出かけていた。彼女はすべて秘密にしていた…彼女は、私の目の上に綿でしっかり蓋をしていたのだ。それを考えると、もう笑えてきてしまう」(Shadow, 12)。ネルは、この語りの中で、リリーを「ひとりの人間として」見ていたと言いながら、実際は多くを見逃しており、「彼女の人生のすべての相 (parameters) を知っ

ていたと思い込んでいた」(Shadow, 6)。ネルの語りは、母の死後の混乱をそのまま呈示しているかのように始まったが、リリーの秘密をすべて知ったあとに書かれている。小説の中では後章におかれている探索の渦中であっては、ネルは動揺し、ときに憤慨もする。「私の母はただ死んでしまっただけでなく、変貌してしまった。私は彼女について、彼女の生活についてなにも知らなかった。私はずっと幻を愛していたのだ」(Shadow, 299)という思いに捕らわれてもいる。しかし、第1章の語りをする時点で、「機会はあったのに、それを逃してしまったのだから、私の負けなのだ」(Shadow, 4)と、リリーのあっぱれぶりに降参しましたといさぎよく敗北宣言をしている。ネルは、「私の母親」として語りはじめた女性を、「母親という終身刑」から解放し、第1章の最後で、彼女にフルネームで呼びかける——「ああ、リリー・ギルモア。あなたのことをもっとよく知りたかった」(Shadow, 12)。

この願いに応えるように、第2章は、1992年のオックスフォードにフラッシュバックし、コーチバスの運転手が、座席で静かに涙を流す小柄な女性客を見つける場面から始まる。まるで、リリーが生き返ったかのような印象を与える演出である。すぐに涙を拭き取って元気を取り戻した彼女は、運転手の目には、「まるで美しく着飾ったコマドリのようにだった。完璧なカッティングの服は、お世辞を言われるのを待っているようだった」(Shadow, 16)。彼女が鞆から取り出した手紙から、Drapier Collegeの図書館の製本と修復にかかわるMr Garnierに会いに行こうとしていることが読者に明かされる。このあたり、じつに映画的なカメラワークである。

作者は、ネルが見逃していたリリーの多面的な相(parameters)を直接読者に見せようとしているようだ。ヴァージニア・ウルフが*To the Lighthouse* (1927)でとった手法が思い出される。『燈台へ』の中で、画家Lily Briscoeは、自分の絵のモデルであり、憧れの対象であるが反発を感じてもいるMrs Ramseyの姿を、キャンバスに再現しようと努めながら、「50

組の目が彼女を見るのには必要だ。50組でも一人の女性の全容を捕らえるのには不十分だ」(*Lighthouse*, 167) と考える。この認識を反映するように、ウルフの小説はさまざまな人物から見たラムジー夫人像を描いていく。『燈台へ』は、ウルフの母をモデルとしたラムジー夫人を取り戻そうとしたエレジーの趣きをもっており、『落ちる影』は、娘による母への追悼歌と考えることもできる。後でも触れるが、ジェマ・オコナーは、ウルフへのオマージュを、作品の中にしのびこませている。『燈台へ』でウルフがとった手法を、オコナーが、ウルフの画家と同じ名前を与えた女性を描くためにとったと考えても、途方もない推測ではないように思われる。リリーは、ラムジー夫人の全貌を捕らえるためには、「ひと組の目は、彼女の美しさにまったく鈍感でなくちゃ」(*Lighthouse*, 167) と考えていた。『落ちる影』のリリー・ギルモアの美しさに惑わされない人物として登場するのが、ドレイピア・カレッジの受付嬢である。彼女の目に映るギルモア夫人は、「品がなくて、なれなれしすぎる…大声の押しの強い年寄り」である。彼女は、「どこのものともわからない奇妙な訛り」(強いダブリン訛りだと読者にはわかる) が気に入らず、「ぜったいに教育を受けていない」と判断し、夫人を追っ払おうとする (*Shadow*, 20-21)。一方、ギルモア夫人は、高級ドレスメーカーとしての目を光らせ、受付嬢のださい身なりをどうやったら直せるかを、「悪意からではなく、習慣から」考える (*Shadow*, 20)。最終的には、高飛車な受付嬢に見事に勝利をおさめるギルモア夫人の寸劇は痛快である。

かくして、彼女は図書館の奥の部屋に向かう許可を勝ち取る。音を立てないように靴を脱いで部屋に入り、ヘッドフォンをして作業をする年輩の男を静かに見つめる。髪は白くなったが以前と変らぬハンサムだ。彼女が来ていることに気づいていた男は、クスクス笑いをして、彼女の存在に気づいていることを知らせる。彼女は、鞆から、キャンバス地の包みを取り出し、古い工具類を披露する。

「ずっと持っててくれたのか？」彼は彼女の方に両腕を伸ばした。

「ああ、リリー・スウィートマン」彼は、信じられずに頭を振った。

「君を見ると目が痛む。いったいどうやって僕を見つけたんだい？」

(*Shadow*, 26)

50年前にふたりの間になにがあったのかは読者にはわからない。しかし、長い年月に隔てられながら、ふたりはすぐにお互いを認めあう。第1章の最後で、母であることをやめて、リリー・ギルモアとなった彼女は、この第2章で、ギルモア夫人という被いを脱ぎ捨てる。リリー・スウィートマン、彼女は、むかしの名前をここで取り戻す。小説が、つづく第3章で、リリー・スウィートマンの過去へ、1941年5月31日へとフラッシュバックするためのお膳立ては整った。

3

『落ちる影』は、犯罪の目撃者がみずから選んだ沈黙の代償についての物語である。(なお、あらかじめお断りさせていただくことになるが、これからの論では、ミステリ小説紹介の鉄則とも言える、謎や秘密の種明かしをしないというルールを破らざるを得ない。ご勘弁いただきたい。)三人称で語られる第3章の舞台は、中立を保っていたダブリン、リングセンドの荒廃した住宅地である。母親は子どもの世話を怠っているために、障害を抱えた小さな弟 Jimmy の世話は、15歳間近の少女リリーに任されている。彼女は必死に弟を落ち着かせようとし、男が外のドアをがちゃがちゃと開けようとする間、「ああ、どうか神さま。彼女は耳に指を入れ、こわばったまま横になり、心臓はどくどく打っていた。どうか彼を中に入れてないで。入れさせないで。だれか、どうか」と祈り続ける。その男は、いらだちまぎれにドアを蹴り、彼女の母親になにか怒鳴ってから去っていく。「あの錠がもちこたえたんだ。Milo の錠が護ってくれたんだ、彼女は勝利感の中で思

い、心の中で感謝の祈りを捧げた」(Shadow, 31)。

彼女が、入って来ないようにと必死に願っている男が、この辺りの住宅の家主 Buller Reynolds, 小説冒頭で銃で殺される男である。彼の侵入を阻止した鍵を取り付けてくれたのがマイロ、第2章でリリーが探し当てた男性である。マイロの名前が最初に出てくるこの場面で、彼が、リリーの安全を護る鍵をつけてくれた人物として言及されていることは重要である。彼女とマイロとの間には、キスのひとつも、愛の告白もなかったにもかかわらず、リリーは自分達は愛しあっていると信じ、彼が戻ってくるのを20年近く待ちつづけることになる。リリーがマイロへの忠誠を保ち続けたのは、この鍵に象徴されるように、彼が自分を護ろうとしてくれたことへの感謝の思いであった。また、この場面が暗示しているように、リリーの恐怖はブラー・レノルズに暴力的に侵入されることである。彼女がレノルズに感じている怖れの激しさは、暴行を受ける可能性に対するものばかりでなく、それが過去に起こってしまったことをも推断させる。彼女が、自分に与えられた傷について語れる場所は日記の中だけであった。40年が経過した1980年の日記の中で、彼女は、夫 Frank に対する思いが、「情熱的ではなかったが、しっかりとした」愛情となっていることをつづり、「彼には想像力がないと思われていたけれど……私がどうして結婚を先延ばしにしていたのか、なぜ私が彼に触れられるのを怖がっていたのか知っていた……けっして、無理矢理聞き出そうとしなかった」(Shadow, 431) と記している。ようやく1983年の日記に、彼女が、夫の死の床において、過去の傷を告白したこと、50年前に起こったことを記した部分が見られる。しかし、日記のこの部分は、リリーと再会を果たしたマイロが綴じ合わせる、ふたりの日記には収められない。綴じ合わされなかったこの数頁は、リリーの秘密として、マイロが彼女のために作った箱に収められ、小説の終盤の第33章で、娘のネルに読まれることになる。

夜の空をゆきかうサーチライト、遠くで響く銃撃やサイレンの音を背景

に、リリーの恐怖は募っていく。「ここ数週間、空襲があるという噂をずいぶん聞いた。でも、マイロは、そんなのはばかなたわごとだと言った、アイルランドは、ちゅうなんとかだから爆撃されないんだって。いっそのこと、ダブリンが爆撃を受け、自分の家が最初に燃えてしまえばいいと彼女はなかば願っていた。できれば、あのブラー・レノルズもいっしょに。ほかのみんなは逃げればいい」(Shadow, 34)。この願いの直後、リッフィー川を隔てたノース・ストランドが爆撃を受け、その爆撃と同時に、レノルズが、リリーの家の前の通りで殺される。まず自転車に乗った者が現れ、銃を取り出す。リリーは、「彼女の秘密のスパイ穴」(Shadow, 35)から一部始終を見ており、実際に彼を殺したのは、茂みの横に立っていた別の男から発射された銃であることを目撃する。当時のリリーにわからなかったのは、その現場を、べつの家の茂みの陰からマイロが見ていた理由であった。マイロは、不用意にも殺された男に近づき、それを見た別の住民から殺人者だと思い込まれてしまう。あわてたマイロは、製本の道具の入った包みを落とし、その場から逃げ出す。姉にことの次第を打ち明けた彼は、数日後に姉の友だちたちと自転車に乗ってでかけ、彼だけはそのままベルファストまで行き、英国軍に入隊することになる。彼が家を発つときに、リリーは苦勞して取り戻した彼の道具入れを示して、そっと彼を見送る。マイロは、彼女を認めうなづいてから、一瞬ぎよつとした顔つきをして去る。これが、ふたりのダブリンでの最後の会見であった。

このあと、三人称の語りが続き、第9章までが、事件後の顛末からリリーが17歳になるまで、第10章では、レノルズ未亡人が戦後に故郷のイングランドに息子を連れて戻るまでが描かれる。マイロについては、英国軍に入隊した以外は謎のままとなる。リリーへの想いを抱きながら、彼が第二次大戦をどのように体験したのか、彼を捕らえて放さない恐怖による悪夢と神経衰弱については、20年に亘るふたりの日記がネルによって読まれる、第19～20章まで待たなくてはならない。彼の日記は、アイルランドの中立

に反感を募らせる北アイルランド出身の志願兵からの敵意，大戦中の体験，入院中のロンドンの病院の爆撃による片足切断，死んだ男と報じられたまま，フランス女性と結婚するまでを語っている。リリーの日記は，殺人事件の捜査，マイロへの想い，弟のジミーの健康状態の悪化と死，裁縫の仕事で徐々にまともな家と生活を得ていく様子を書いている。

北アイルランド出身の女性詩人 Eavan Boland (1944-) の主張を，Gray が要約した言葉を，ここで引用したい——「アイルランドの伝統的な文学における女性の類型化された表象は，その下にある現実を覆い隠してしまうものの削除することのない言語として機能している。現実の血と肉を備えた女性たち——国家の歴史を立てて見てきた『恐ろしい目撃者(たち)』であった一方，彼女たちを見えなくしてしまう文化的心理的アイデンティティを構築するのに共謀してきた——彼女たちは文化的な文書の中には不在のままである」(Interview in Somerville-Arjat and Wilson 83;cited in Gray: 2000, 284)。まさに，リリーとマイロは，歴史の目撃者であり，同時に，沈黙によってかれらの経験を不在にしつづけてきたということにおいて，共謀者でもあった。私はあえて，小説の導入部に焦点を絞ってきた。それは，この小説がとった現在と過去を交叉させる手法が，過去，あるいは歴史が，いかに個人に影響を与えるのかというテーマを描き出すばかりでなく，リリーを，類型化した女性像ではなく，「現実の血と肉を備えた女性」として描こうとした作者の意図を示したかったからである。リリーは，犯罪と歴史の目撃者であるが，女性の類型化が陥りやすい歴史の「犠牲者」ではけっしてない。彼女は，それを生き抜き，人生を愉しもうとしていた。短い寸劇のような第2章が重要なのは，あの場面を，彼女の生き方の集約として読むことができるためである。彼女はへこたれず，死んだと信じられていたマイロを一人で探し当てた。彼女は，マイロにもう一度生きることを取り戻したのだ，と言っても過言ではないだろう。マイロは，リリーの死後に，息子の Daniel に宛てて書いた手紙の中で，「彼女は私の生命だっ

た。そして、彼女の死に責任があるのは自分なのだ」(Shadow, 407, 413)と書いている。

たしかにレノルズ殺害はふたりの運命を決定し、両者は沈黙を選択する。しかし、それは、ふたりを引き離しもした。リリーにとっては、彼が殺されたことはもっとも恐ろしい脅威からの解放を意味したのに対して、マイロにとっては、彼が知ってしまったと信じた殺害者への恐怖の始まりであったからだ。マイロは、綴じ合わせた日記の中にさえ、彼の人生を文字どおり逃亡に変貌させてしまった理由を書かなかった。彼がそれを告白するのは、リリーの死後、息子への手紙の中になる。

4

私は、先に、ディック・フランシスの『直線』が『落ちる影』にヒントを与えた可能性を指摘したが、より大きな影響を与えたと考えられるのが、ヴァージニア・ウルフが晩年に書いた、女性の日記を扱った短篇小説“The Legacy” (1940年に執筆)である。この短篇の中で、自殺を遂げた Angela が遺す日記は、彼女の夫が知っていたと信じ込んでいた彼女の別の面を明らかにする。アンジェラの日記を読み飛ばす彼の姿勢は、彼女の生の諸相を見逃してきた彼の視線を反映している。彼女の日記に徐々に現れる隠蔽(愛する男の名前は B.M. とだけ記される)、削除、空白の頁は、夫への抵抗の痕跡であり、語ること／読まれることを拒む彼女の姿勢の表れである。物語の終幕で、空白の頁を最後に閉じられる日記は、彼の手から床へ落下し、彼は、アンジェラが彼から逃れるために死を選んだことを知る。

さて、ジェマ・オコナーは、第1作の *Sins of Omission* の中に、BM と署名する研究者と、長年ともに暮らしてきたゲイのパートナー Roy Angel を登場させている (Cf. *Sins of Omission*, 235, 241-43)。これは、明らかにウルフの短篇に対するひねりを加えたオマージュと考えられる。『落ちる影』は、オコナーが、「遺産」のプロットとテーマを、犯罪小説のなかで、さま

さまざまな文脈で応用しようとした試みでもある。ウルフの「遺産」は、いかに女性の書きものが読まれるか、あるいは、読み飛ばされるかを描くことで、女性の生が十全に認識されることがどれほど難しいかという問題を提起している。ジェマ・オコナーの主人公ネルも、アンジェラの夫がしてきたように、母リリーの生の多くの相を見落としてきた。彼女が死んだあとになって初めて、ネルは、彼女が沈黙のまま残した領域に分け入っていくことになる。ミステリの変種ともいべき『落ちる影』においては、リリーの遺したさまざまなものをどう読むか、あるいは、ちゃんと読み取ることができるかが、ネルが危難を乗り越えるための鍵を握る。リリーの遺品は、物語の中にちりばめられているので、そのすべてに言及することは不可能であるが、ウルフの短篇のもっとも明らかな影響を示す場面は、ネルが日記の中から、リリーが愛していた男性のイニシャルを判読する場面である——「彼女が掻き消し、読めないようにしていた文字の下に硬いものを敷いて、軟らかい鉛筆で、(ありがたいことに空白だった) 頁の裏を擦って解読することができた。M という文字が、ついに、浮かび上がった。かすかではあったが、見まちがえることはなかった」(Shadow, 271)。アンジェラの夫にとっては、なにもない無でしかなかった空白の頁は、ネルの熱意に答えて、リリーの秘密を語るなのである。

『落ちる影』においては、読み解かれるものは、日記や手紙等の書きものばかりではない。葬儀の翌日、ネルは、父親が殺害された理由とその財産の行方を探るブラー・レノルズの息子 Arthur から、リリーのリングセンドでの暮らしぶり、彼女が故意にひき逃げされたという恐ろしい可能性を告げられる。動揺して母の家に戻ったネルは、「初めて、彼女が自分のものを大事にしてきたのは、長い間貧しい暮らしをしてきたためだとわかった」(Shadow, 158-59)。リリーの住居であった家の小さな品々が、ネルに語り始める。「私は、部屋の戸口のところに立ってみては、彼女のことを思い浮かべてみた。椅子に座ってるところ、ばかみtainな赤い埃とり用の羽帚

をばたばたやっつてるところ。ああ、リリー。あのばかな羽帚でさえ、明るくて愉快そうでなくちゃならなかったのね」(Shadow, 158)。

リリーが殺されたのならMも危ないと考えたネルは、綴じ合わされた美しい製本の日記を作った人物がMであると推理し、その表紙から製作者をつきとめようと探索に乗り出し、その人物がオクスフォードにいるらしいことを突き止める。(この製本者を探る過程で、第1作の主人公のGraceがネルに手を貸すことになる。)製本者に会うためにオクスフォードに向かおうとしていた矢先に、ロンドンのネルの家に、マイロの息子と名乗るDaniel Garnierが訪れてくる。得体のしれない男Hanlonに付きまといわれ恐慌状態になっていたネルを落ち着かせた彼は、1年半前オックスフォードで、偶然彼の父が女性と一緒にいたところに遭遇したことを話す。「ふたりは、幸福な子どもみたいに夢中で喋っていた……素晴らしかった、ふたりはほんとに愛しあってた」(Shadow, 322)と、そのときの様子を語る。彼がその女性に頼まれて写真を撮ったことを告げ、ネルは、リリーが隠していた写真の束を見せる。ネルの猜疑心を取り除くのは、ダニエルがその写真を解説する、以下の場面である。

「ほら、こっちが、僕の父が撮ったもの。彼は建物に焦点を合わせているのがわかるだろ？ きみのお母さんはちょっとぼけてる。で、こっちが、きみのお母さんが撮ったほうだ。父にちゃんと焦点が合っていて、建物がぼけてる」

「母にとって彼がそうだったほど、彼にとって、母は重要ではなかったってこと？」

「もし僕がふたり一緒のところを見てなくて、この写真だけだったら、たぶん、僕はそう思っただろうね」彼の話ぶりは穏やかだった。「でも、僕は見たんだ。そうじゃない。僕の父は怯えてるんだ。人生とひとをこわがってる。それが彼の習慣なんだ。それをこの写真が表し

てるんだ。自分を変えようにも年をとり過ぎてる。父は彼女を愛していた、そのことについては誓ってもいい。でも、たぶん、彼女でさえ父を完全に救うことはできなっただ」彼は写真を押しやると、目の上に手をやった。(Shadow, 323)

リリーとMの日記を読んでいたネルは、ダニエルの父マイロが、リリーの愛したMであり、日記のもうひとりの筆者であることを理解する。日記は、彼の怯えつづけた生の記録であり、ダニエルは、そのような生の証言を、写真に読み取ってみせるのである。

製本者探しとダニエルの登場によって、重苦しくなりかかっていた物語に華やかさと愉しさが加味されてくるのだが、物語は、急ピッチで終幕へ向かう。ダニエルとともに、危篤状態のマイロを見舞ったネルは、マイロから、リリーのために作った箱の存在を知らされる。重要なのは、マイロの家で、その在り処を探っていたネルが、リリーがマイロと再会した1年目の記念日に書いた手紙を見つけてしまうことである。その手紙は、マイロとのセックスによって、リリーが初めて感じた幸福をつづったラブレターであった。リリーは、自分達の肉体がおたがいを「まったくの、狂ったような、有頂天の悦び」に導いたことを率直に書いている。一方、ネルがそれを知ったときの反応も予想していた——「私は、若い人たちの目に、私達の恋を曝してしまう心の準備ができてないの」、「子どもたちに、私達がしてることを、みっともないとか、いやらしいとか考えてもらいたくない」(Shadow, 376, 378, 379)。彼女は、「あなたをまだほかの人とわかち合いたくないの。だから、言うのは待ってと頼んだのよ。……あなたが、ダニーに言うのがたいへんなんだと打ち明けたとき、思わず笑ってしまった。あなたが言ったことは、私が言おうとしてることなのよ、それはあまりに大切なこと。私達のもの。他のひとには知られたくないもの (Private)」(Shadow, 378)。「自分達の日記を一緒にして、ネルとダニーが気が向いた

ときに読んでもらう」というマイロのアイデアが気に入ったのは、なにより、「日記を綴じ合わせる作業の間、自分達には時間とプライバシーが長く持てる」とリリーが考えたからであった (*Shadow*, 379)。

母親の秘められた恋が死後に見つかるというプロットは、世界的なベストセラーになり、映画化もされた『マディソン郡の橋』(1992)を思い出させる。しかし、ジェマ・オコナーは、自分たちのセクシャリティを語るリリーの手紙を、そのまま読者に公開し、また、それを知った娘の動揺をきちんと描いている。ネルは、「彼女は私のものというより、彼のものだった」と傷つき、「ふたりのために喜べるだけの寛容さをもつべきだったが、できなかった。自分の母親が、あんな熱情や官能に身をまかせてしまうなんて、認めたくなくなった。できなかった。汚らわしかった」と感じる (*Shadow*, 383)。この発見の直後に頭を強打されたネルは、マイロの死を知り、ダニエルと彼女の理解ある上司の尽力で私立病院に移される。母への嫌悪感に変化の兆しが見え始めるのは、親友のマライアの励ましを受けながら、母の秘密を収めた箱と対決する気力を取り戻してからのことである。まず、自分の死を予想した時点で娘に宛てて書かれたリリーの手紙が公開される。つぎに、マイロがダニエルに宛てた手紙が明らかにされる。ダニエルが同封してきたマイロの手紙は、「私がりリーを殺したのだ」(*Shadow*, 407, 415)という出だしで始まる。この中で、マイロは、綴じ合わせた日記に収めなかった秘密を、息子に告白する——「私達は日記を一緒にしたが、お互いの話を合わせてみることをしなかった。私にはできなかったのだ。こんなに時が経ったあとでも、姉のために自分を犠牲にしてきたと言うことが耐えられなかった」(*Shadow*, 424)。

マイロは、また、リリーが彼のもとを最後に訪れたときのことを語っている。このとき、ブラー・レノルズがとんでもない人間だったことをなにも知らない息子のアーサーが探って回ったことによって、リリーは、自分とマイロの命が危なくなつたことを認識していた。リリーは、自分がマイ

ロの姉のドレスメーカーを長年してきたことを告白し、彼女の推理した事件の真相を語り、彼に、もう黙っているわけにはいかない、「自分達は過去を清算しなくちゃ」と迫る (*Shadow*, 425)。しかし、彼にはその勇気がなかった。マイロの手紙の中で、もっとも痛ましいのは、以下のくだりである——「私達はおたがいをずっと見つめあっていた。私達をしっかりと結びつけていたものが、ほどけはじめた。しまいには、私達は、正直に打ち明けあうのが怖くなった」 (*Shadow*, 427)。マイロは、綴じ合わせたふたりの日記の表紙に、「からみ合った L/M」のモチーフを刻印していた (*Shadow*, 182)。しかし、肉体を合わせ、日記を美しく綴じ合わせたにもかかわらず、ふたりの恋人たちの間には、マイロの怖れとリリーの秘密が存在しつづけていた。「彼女は突然、とても小さく、うちひしがれたように見えた。我が身を護ろうとする私の決意が、ふたたび、彼女を打ち負かしてしまったのだ」 (*Shadow*, 428)。

この告白を読んだネルは、「リリーの夢が、ぼらぼらに破れてしまったことを知らないでいたかった」 (*Shadow*, 428) と、母のために胸を痛める。このあと、ネルは、母が箱にしまっていた彼女の日記から、リリーが、50年前にブラー・レノルズによって暴行を受けたこと、マイロが殺人の晩にリリーの家近くのいたのは、彼女を護るためであったことを知る。そしてついに、ネルは、犯罪者の一人にリリーが知っていることを仄めかすことによって金を得ていた確証を得る。リリーの日記には、「危険かもしれない。私にその勇気があるかしら？」 (*Shadow*, 432) と書かれている。ウルフの短篇「遺産」が思い出される。アンジェラが日記の最後に記した言葉は、自殺した恋人 B.M. のあとを追う決意を表明していた——「私にもそれをする勇気はあるかしら？」 (*Legacy*, 286)。リリーが、結果的には死線を超えることになる危険な決意をしたのは、ネルの進学と病気の夫のためであった。

むすび

『落ちる影』は、エレジーの趣をもつ。ネルがどんなにリリーの隠された多面体的な相を知っても、もう彼女を取り戻すことはできない。犯罪小説の体裁を借りたこの小説は、ネルによる母親探しの物語であるが、その探索を通して、彼女は自分がいかに母を知らなかったかを知ることになる。

一方、作者は、リリーが願ってかなわなかった夢を、彼女の娘とマイロの息子を結びつけることで成就させてもいる。このことが、この物語を読む読者にとっての救いでもある。ふたりを結び合わせたのは、マイロが綴じ合わせた日記であるが、リリーとマイロは、自分たちが書いた日記を合わせることはしても、長い間、おたがいの話を合わせてみることをできずにいた。ふたりの間には、おたがいの秘密が横たわっていた。しかし、リリーは、恋人にも言えなかった秘密を最後に娘に伝えてもいる。脅迫という罪と、自分の肉体と精神が被った傷を含めて。新聞の切り抜きと、綴じ合わされる日記からは削除した数頁の日記と、叫びにも似た救いを求める娘に宛てた手紙の中で。彼女は、それらをすべて小箱に収めて娘に遺したのだ。ネルは、箱の中に収められたものを読んだ後に決意する——「私は、もうひとりのマイロになりたくない。自分をサンドバッグにするために差し出したりするつもりはない。……それに、ダニエル・マクドナー・ガルニエが、リーダー然として進んでいく後ろを、おとなしくついていくつもりなんかない、たしかに彼のことは大好きだけど。リリーは私を危険な目に遭わせた、でも、リリーはそこから脱出する方法も遺してくれた。……リリーはマイロを、一度は確実に、もしかしたら二度、救った。たぶん、ダニエルをなんとかするのが私の運命なのだ」(Shadow, 442)。

結果的にネルとダニエルを救う鍵となる、リリーの秘密を収めた箱を作ったのは、マイロであった。彼は、彼には言うことができない秘密をリリーが抱えていることに、気づいていたにちがいない。すくなくとも、彼

女の傷については。過去の影に怯え続け、逃げ続けることしかできなかったマイロは、しかし、その箱には収まらないリリーを、自分のものともする幸福を得てもいた。リリーが彼に宛てたラブレターは、つかの間であったにせよ、彼女とマイロが、至福の悦びを味わうことのできた恋人であったことの証である。ネルは、それを発見させ自分に読ませたマイロを怨んだ。自分の母親が経験し、それを臆面もなく語る有頂天のセクシャリティに嫌悪すら覚えた。しかし、ジェマ・オコナーは、リリーの恋が批判されないよう周到な準備をしている。この手紙をネルが読む場面までに、リリーがブラー・レイノルズへ示していた恐怖の度合いから、読者は、リリーの肉体が傷つけられたことを十分推測できるはずである。ネルがリリーの悦びをこの時点では容認できないのに対して、読者の多くは、マイロと肉体を合わせることによって、リリーの過去に傷つけられた肉体と精神がようやく癒され、彼女がみずからの身体性を取り戻し、初めてセクシャリティを認識することができたことを知って、ああ、よかったと思うのではないだろうか。リリーの遺した箱の中身を読んだ後、ネルも、母が生を愉しんだことに安らぎを見出したはずである。しかしだからこそ、その彼女の悦びの短命さが惜しまれる。

リリーの死は、彼女とマイロが語り合うことでなく、沈黙をまもりすぎた報いとも考えられる。リリーを死の罠に陥れることになったのは、ブラー・レイノルズの息子アーサーであるが、彼は、自分の父親について、その死因さえ長年知らずにいた。彼の母の沈黙が、父親がどのような人間であったかについて、息子を全く無知なままにしたからである。このことを考えるとき、削除し、語らないこと＝沈黙の危険性というテーマが、よりいっそう浮かび上がってくる。

リリーが沈黙をつづけた理由のひとつは、マイロとの恋をだれにも話したくないという思いであった。しかし、彼女の日記は、ネルに「すべて話そう」という決意で終わっている (*Shadow*, 440)。彼女の沈黙は、ネルに

よって破られ、読み解かれる。最後に指摘しておきたいのは、リリーの身体性の開花としてのセクシャリティの実現と、彼女の声の復活が、1990年代のアイルランドの社会の新しい動きと呼応していると考えられることである。ジェマ・オコナーは、50歳に至る準備期間の末に、彼女が語りた物語をようやく書くことができると確信したのであろう。長い間、封印されてきた沈黙を破って、リリーの物語は、娘への遺産として甦る。オコナーは、その復活の過程そのものを、物語りたかったのではないだろうか。

ネルの呼びかけにならって、私も、この論を終えることにしよう。リリー・ギルモア、旧姓スウィートマン。あなたは、悲惨な人生にもへこたれなかった。娘や夫のために危険を冒すこともやってのけた。けっしてこわくなかったわけではない。それでも、「人生は楽しまなくちゃという精神 (*joie de vivre*)」 (*Shadow*, 12) を失わず、ずっと愛してきた男性を見つけだした。私は、あなたのことを知ることができてよかった。犯罪小説の世界で生き残るのはなかなか難しいことだけど、あなたの物語が生き延びてくれることを願わないでいられない。

註

I wish to thank Jane Heuston, who introduced me into Gemma O' Connor's work.

- (1) "The interview of Gemma O' Connor by Richard Laymon Kills!" (April 1999), RLK! Spotlight On ... (The Official Richard Laymon Site). <http://www.ains.net.au/~gerlach/spoton4.htm> なお、リチャード・レイモン (1947-2001) は、アメリカのホラー小説家で、日本でもいくつか翻訳がでている。
- (2) 小説冒頭を支配しているのは、語り手 Grace の、得体のしれない不安と恐怖に彩られ、混乱した心理である。この部分を読むのには、かなりの忍耐を必要とする（少なくとも、私はかなり苦労した）。また、もしこの小説をミステリとして考えるならば、構成上の最大の欠陥は、グレースが追っていた姉の死の原因と、姪の愛人の自殺についての種明かしがされてから、なんと100頁かけて、姪の死への歩みが描かれていくことである。いかに彼女の苦悩が真剣なものであっても、冗長に過ぎるという印象を与えざるを得ない。しかしながら、混乱がすくない第3作よりも、私はこのデビュー作のテーマと語り的魅力を感じる。最後まで読むと、冒頭の混乱した、主人公の意識、

断片的な情報をとぎれとぎれにしか読者に呈示しない語りそのものが、自己の履歴に空白を抱えたグレースの内面を描くための、意図的なものではなかったかと思われるからだ。

- (3) これまでに二つの論にまとめてきた。「日記をめぐる二つの物語：ヴァージニア・ウルフの「ジョウン・マーティン嬢の日記」と「遺産」(『調布学園女子短期大学紀要』24 (1991):133-161), 「手渡される日記の物語：Anne Brontë の *The Tenant of Wildfell Hall* における語り」(『調布学園女子短期大学紀要』29 (1999):247-277) を参照されたい。

引証資料

- Francis, Dick. *Straight*. 1989. 菊池光訳『直線』ハヤカワミステリ文庫. 東京：早川書店, 1995.
- Gray, Katherine Martin. “The Attic LIPs:Feminist Pamphleteering for the New Ireland.” *Border Crossing: Irish Women Writers and National Identities*. Ed. Kathryn Kirkpatrick. Dublin: Wolfhound Press, 2000. 269-298.
- O’ Connor, Gemma. *Sins of Omission*. 1995; London : Bantam Books, 1995.
- . *Falls the Shadow*. Dublin: Poolbeg Press, 1996.
- . *Farewell to the Flesh*. London : Bantam Books, 1998.
- . *Time to Remember*. London : Bantam Books, 1999.
- . “The interview of Gemma O’ Connor by Richard Laymon Kills!”. (Online) Available <http://www.ains.net.au/~gerlach/spoton4.htm>, (April 1999).
- . *Walking on Water*. London : Bantam Books, 2001.
- . “Biography.” (Online) Available <http://www.gemmaoconnor.com/biography.htm>, (no date).
- Woolf, Virginia. *To the Lighthouse*. 1927. Ed. Susan Dick. Oxford: Shakespeare Head Press by Blackwell Publishers, 1992.
- . “The Legacy.” *The Complete Shorter Fiction of Virginia Woolf*. Ed. Susan Dick. 2nd ed. London: Hogarth Press, 1989. 281-87.